



富山神通ライオンズクラブ
2020-2021 メイン事業

作文 コンクール

テーマ

『今、思うこと...』

優秀作品集



主催：富山神通ライオンズクラブ

後援：富山市教育委員会、北日本放送、富山テレビ放送、北日本新聞社、富山新聞社

富山神通ライオンズクラブ

〒930-0082 富山市桜木町10-10号 富山第一ホテル5F
TEL:076-441-8333 FAX:076-433-3304

作文コンクール(メイン事業)の主旨目的

2020年、世界中にパンデミックを巻き起こし人々を不安と恐怖に陥れた『新型コロナウイルス感染症』。多くの死者をも出すこの恐ろしい感染症は人々の生活を一変させ、様々な爪痕を残す結果となりました。我々経済人はもとより、多くの学生にも学校の休校・塾の閉鎖・クラブ活動の自粛等々、生活の様々な場面に不自由を強制しました。

負の側面が多いこのコロナ禍ではありますが、この辛い体験を通じて気づいた事や感じた事など、本来私たち人間が最も大事にすべき『何か』を感じ取った人も多いのではないかと思います。

この経験を振り返りそして作文にすることにより、今後の彼らの生きる道しるべにしていっていただくこの企画を考えました。

新しい生活様式としての『三密防止・ソーシャルディスタンス・非接触・ステイ home』を順守した上の、『青少年育成事業』として実施いたしました。

作文コンクール テーマ「今、思うこと・・・」

最優秀賞

「今、思うこと」

富山市立速星中学校 一年 笹本 想・・・2

優秀賞

「情報と私」

富山市立西部中学校 三年 川端 悠花・・・3

「コロナウイルスによって」

富山市立北部中学校 二年 長谷川 奈月・・・4

「私の毎日」

富山大学人間発達科学部附属中学校

二年 天谷 果愛・・・5

「今、思うこと」

富山市立東部中学校 二年 川畠 和・・・6

審査員

山下 富雄氏(元県立高校長)

富山神通ライオンズクラブ 審査委員

「今、思うこと」

富山市立速星中学校 一年 笹本 想

今から約半年前、私達は、迫る卒業に向けて、ラストスパートをかけ、沢山の事に取り組んでいた。そんな時、先生から告げられた事、それは「休校」の二文字だった。

「あと学校に来るのは、二日と卒業式のみです。」

正直、その時の私の気持ちは、絶望に近かった。これからどうなるのか不安だったし、このまま小学校生活を終える事に悔しい思いが大きかった。

時間と共に、現実を少しずつ受け入れ、未来を見られるようになったが、私達がすべき事、出来る事は何か、答えはどこにもなかった。今までと違う日々の中で私達がやりたい事は出来るだろうか。そして、何より私達が本当に伝えたい事が伝わるだろうか。不安は大きかったが、私達は足をとめず、常に進み続けた。正しい方向に進んでいるのかなんて分からないけれど。

下級生と過ごせる最後の二日間は、大事な時間だった。伝えたい事、したい事は沢山あった。でも時間がない。焦りと混乱の中で、私達は話し合いを続け、そして、辿り着いた答え。それは「歌」だった。たくさん言葉は伝えられなくても、歌に全ての気持ちを乗せて届ける。私たちに出来る最大限の事だった。歌にこめた想い、私達が一番伝えたかった「ありがとう」そして「学校をよろしく」という事。距離は離れていたが、下級生の凛とした表情を見ると、しっかり伝わったと感じた。

そして迎えた卒業式。下級生の姿はなく、呼びかけは書面で配

られた。その現実を私達は受け入れていたが、ひとつだけ譲れない事があった。

「歌を歌わせてほしい。」

それだけで良かった。歌には、想いを届ける力がある。マスクを着けたままでも、きつと強い想いがあれば届く。そう信じて、懸命に歌った。きつと想いは届いたと思う。先生や保護者の方の涙を見て思った。それは、私も同じだった。自分で歌いながら、みんなの歌を聴きながら、自然と涙が流れた。達成感からだった。沢山の事があった。辛い事、上手いかない事、嬉しい事、楽しい事。やり遂げられなかった事もあったけれど、悔いはなかった。今、出来る事をやりきったから。

「休校」という現実を突きつけられたあの日から私達は進み続けている。壁にぶつかっても、前が見えなくても。

私は、休校中に気付いた事がある。それは、当たり前なんて存在しない事。初めて、日常を奪われ、今まで当たり前だと思っていた事は、「幸せ」だったと分かった。毎日学校に行けて、友達がいて、家族がいて。明日があつて、そしてなによりこの命がある事がどれだけ幸せな事かと。

中学入学後の休校を経て、私達は、新しい日常を歩み始めている。前の日常とは違うけれど、今、私は学校に毎日通えている事が本当に幸せだ。先生や友達に会える事、授業や部活ができる事、何一つ当たり前ではない。だからこそ、この幸せを大切に、今の一瞬一瞬を大事に、精一杯生きていきたい。

「明るい未来につながると信じて…」

「情報と私」

富山市立西部中学校 三年 川端 悠花

私は今まで、ニュースで流れてくる情報をどこか他人事のように感じていました。

「今日は百人以上が新たに感染しました。」

この言葉が日常に溶け込んで、確かに「大変だな」とは思ったけれど、どこか実体のない話のような気がしていました。

そんなある日、誰もが知っている著名な芸能人が亡くなりました。多くのメディアでトップニュースになり、SNSには悲しみの声が溢れていました。それまでも多くの方が亡くなっていたのに、そのときになってコロナの脅威を一気に実感したのを覚えています。人の命はみな同じ重さのはずなのに自分の反応に矛盾したものを感じました。

そんな時、私の通っていた小学校について驚きのニュースが報道されました。

「四月学校再開。同じ小学校の児童が複数名感染。クラスターか。」

報道と共に、徐々に学校への厳しい見方が増えていったように思います。しかし私は本当に学校側が悪いのか疑問でした。普通に考えて、テレビで毎日のようにコロナの危険性が報道されているのに、感染対策を十分に行わずに学校を再開するものでしょうか。

調べてみると、学校再開当時の感染者は県内で十数名でした。

また、学校のホームページには窓を開放し、用具の消毒がしっかりと行われていることが載っていました。登校時には「もう少し距離取って。」「手、消毒してね。」という先生方の声を聞くこともありました。ここまで知ると、私にはどこの学校でも感染は起こり得たのだと思えてきました。

では、何が学校側が悪いという「風潮」を強くしたのでしょう。それは、自分の知らない人や場所であるために、多くの人がニュースを深く知ろうとしないからではないかと思います。もしそれが自分の身近なところで起きたものだとしたら、本当にそうなのか疑問に思っただけかめようとするのではないか。コロナの脅威についても同じです。もっと早くからニュースを自分のこととして考えていたら、私たちはもっと気を遣って行動していたはずです。そして多くの人がそうしたなら、地方のお祭りも、楽しみだった修学旅行も中止にならなかったかも…と悔やまれます。

これは、いじめ事件や異常気象、世界の紛争のニュースの受け止め方にも通じます。本当に自分と同じように地球に暮らしている人に起きていることだと考えたなら、とても身近なことで感じるのではないのでしょうか。悲惨なニュースなら救ってあげたいと思い、幸せなニュースなら自分も嬉しくなります。一度も会ったことがない私達が、お互いの幸せを願う、きつここれは温かい世界に導いてくれるでしょう。人としてとても素敵だと思っています。だから私はどんなニュースも身近な事として捉えられる人でありたいと今、思っています。

「私の毎日」

富山大学人間発達科学部附属中学校 二年

天谷 果愛

私は学校が嫌いだ。もっと寝ていたいのに早起きをしなければならぬし、通学リュックは重過ぎる。自転車に乗って学校に着いた頃には汗だくだ。椅子は硬いし、授業中先生に名前を呼ばれると心臓がバクバクする。家で過ごす方が楽しいに決まっている。

今年の二月、最初に休校が決まったとき、私は思わず「やった！」と声に出していた。しばらくは本当に楽しかった。のんびり身支度をし、少し勉強したら、空手の自主練をして過ごした。SNSで友達と簡単に連絡もとれるし寂しくなかった。それがどうだろう。私の楽しい休校生活は、新型コロナウイルスの感染拡大によって、だんだんと辛いものになっていった。休校は長期間となり、楽しみにしていた運動会や修学旅行など、たくさんの学校行事が中止になった。友達との買い物や外食も今までのように気軽にはできなくなった。お昼ご飯を自分で作って食べるのもだんだん味気なくなった。そして、出場するはずだった空手の全中選抜大会や夏の全国大会が中止となり、四年に一度の東京オリンピックも延期になった。

私は学校が嫌いだ。でも、今は前ほど嫌だとは思わなくなった。学校に通えるのは幸せなことだと気付いたからだ。休校が長く

なり、担任の先生やクラスメイトとオンライン授業が始まった時、物足りなさと言葉にならないような不安を感じた。ちょうどその頃、新聞で、人間の五感はオンラインだけで相手を信頼しないようにできているという話の紹介記事を読んだ。私たちは視覚や聴覚だけではなく、嗅覚、触覚、味覚も使って信頼を形作っているようだ。学校では授業中、友達とお互いに意見を出し合い、休み時間やお弁当を食べる時間にはおしゃべりと笑い声が止まらない。空手道場では相手の動きや呼吸を感じ取って技を出し合う。オンライン授業やSNSで簡単につながれても、どこか不安だったのは、今まで当たり前だと思っていたことが当たり前ではなくなり、できなくなったからなのだなと思った。そして今まで、いかに自分たちが幸せだったのかを実感した。

今、私は元気に学校に通い、空手の練習も頑張っていて、毎日が幸せにあふれている。しかし、新しい感染症は簡単には収束しないだろう。地震や豪雨などの災害も毎年のように起きている。幸せな毎日は当たり前ではなく、また突然変わってしまうかもしれない。

新型コロナウイルスによる生活の変化を経験して、私はこれから家族や友達への感謝の気持ちを忘れず、一日一日を大切に過ごしていきたいと思う。

「コロナウイルスによって」

富山市立北部中学校 二年三組 長谷川 奈月

私がコロナウイルスによって変化した社会について思ったことが3つある。

一つ目は、私たち人間についてだ。よくテレビなどでは「日本人は優しい人だらけだ」と外国人は言うが、本当にそうだろうか。お金を得るためにマスクを買い占める人、自粛要請がでているのにも関わらず「自分だけは大丈夫」と外へ行き遊ぶ人、これを聞く限り、優しいではなく、自己中心な人が多いように思える。もちろん、みんながみんなそうゆうわけではない。マスクが欲しいのに言えない人、遊びたいのに我慢している人、そんな人たちはきっと大勢いるだろう。それなのに「お金が欲しいから」や「遊びたい」などといった身勝手な行動でなんの罪もない約一万個の命が失くなった。その中には、だれもが知る有名人もおられた。この方たちがなぜ亡くなられたのか、また亡くなられて学んだことを今後の生活に取り入れて生活してほしい。

二つ目は、食べ物についてだ。コロナウイルスなどまだ知らない時、テーマパークや映画館に行くと、ポップコーンを素手で食べることがあっただろう。今思うと、大勢の人たちが触った物に、自分自身も触れ、その触った手でポップコーンを食べるという行為は、とても不潔で今の社会でこのような行為をす

るのは危険だ。前までこのようなことは気にも止めなかったが、今ではスルーしたくてもできないことだ。よって私は今回の事態によって「ポップコーン革命」が起こるのではないかと思う。仮に、コロナウイルスが百パーセントこの世の中から消えたとしても。だが、私は素手でポップコーンを食べようなんて思えない。なぜなら不潔だからだ。コロナウイルスはマスクだけじゃなく、ポップコーンなどに対する価値観も変えてしまったのだ。しかし、もし「ポップコーン革命」が起こるのならば、次のようなウイルスが来た時、少しでもかもしれないが被害を抑えることができるのではないかと私は思った。

三つ目は友達についてだ。学生である以上友達とは毎日会うことになるだろう。友達に会うなんて当たり前のように思えるが、その考えが休校に変化した。毎日のように会って話していた友達と一ヶ月も会えない。これなどそれほど辛かったか私は思いうんざらされた。会いたいののに会えない、いつの間にか、前のような生活が特別になっていった。そんな長い休校が終わり友達に会えた時はうれしくてたまらなかった。だからこれからは日々の生活に感謝しながら学校生活を送りたいと思う。

このように、コロナウイルスは様々な影響を及ぼした。第二波が来るかもしれないというなか、これはみんなまで越えなければならぬ壁だと思う。一人一人自覚を持った行動をし、この事態を乗り越えようと思った。

「今、思うこと」

富山市立東部中学校 二年 川島 和

2020年、この年は私にとって「かがやける一年」になるはずでした。ドキドキとワクワク感をもって、この新しい2020年をスタートさせました。

毎年、元旦に書く今年の一文は「希」にしました。希望の希です。理由は、3月には空手の全国大会出場が決まっていた。6月には東京オリンピックの聖火ランナーとして、富山県を走ることにしていました。もう走る区間も決まっていた。その他にも、中学2年生のこの一年間でやってみたいことがたくさんありました。生徒会にも立候補してみたかったし、14歳の挑戦の職業体験や、新しいクラスの友達とのおしゃべりなど楽しい中学2年生を過ごすはずでした。

しかし、新型コロナウイルスが蔓延したため、私の「かがやける一年」は一瞬で何もかも中止や延期になりました。学校も休校になり、空手の練習もなくなり、毎日していた私の日常が何も無くなりました。誰もが「あなただけじゃない。みんな一緒なんだから」と励ましてくれましたが、前の年に努力してきたことが、白紙になってたかと思うと、とてもショックで泣いたり、落ち込んだりして、毎日をたんたんと過ごしていました。

ある日、ニュースで世界では新型コロナウイルスに感染して、多くの人々が亡くなっていることを知りました。あまりの多くの死者が出ているため、お墓もたりなくなり、その辺にある空

き地に穴を掘って、死者を埋葬している場面を映像で見た時、私はやつと気付く事ができました。何よりも「まずは生きること」が一番大切なんだと。生きてさえいれば、どんなことにもチャレンジできるし、もし、失敗しても、また、再チャレンジできる。生きている イコール 時間があると言うことなんだと気づきました。

私の思っていることや考え方が、余りにも幼稚だったことに、少しの恥ずかしさを感じました。それとともに、自分中心の考え方をしていた、世の中、社会、世界など自分以外のことに目を向けようとしてもしていなかったんだと、反省しました。

私が思うことは、これからの時代は、新型コロナウイルスとの共存を考えながら、すべての生活をしていかなければならないと思います。

「マスク着用」は自宅以外、一人にならない限りマスクの着用は、当たり前になり、「手洗いうがい」は、しましうではなく、絶対にして下さいになり、「検温や消毒」やソーシャルスタンスで人との距離をとることも、義務になると思います。もしかすると、近い未来には法律ができるかもしれません。試合に勝った時ハグし合ったり、負けた時、ポンポンと頭や肩を軽く叩いてくれて、なぐさめてもらうという光景が無くなってしまふのは、さみしいです。

私も春の頃には、マスクをするのも、検温や消毒をするのも正直、面倒だなと思っていましたが、よく考えてみると自分を守るにはこれらの対策は、とても重要なことで、とても効果が

あることなんだと分かり頑張ろうと思いました。また、この対策をすることで、自分を守るだけではなく、家族や友達など私の身近にいる人達も守ることにつながると気づきました。

ですが、社会全体、地域全体で、この対策に取り組んでいかないと、新型コロナウイルスに感染する人が減少することは無いような気がします。

私たち若い人が、特に気を付けるべきだと思います。そうすることで、年配の人たちに知らずに感染させて重症化させることを防げると思います。私にも一緒にくらしている祖父と祖母がいるので特に気を付けて、マスク着用、手洗い、うがい、消毒、ソーシャルディスタンスをたもつを徹底していきたいです。

きつともう少ししたらこれが「当たり前」の世の中になり、私たちも違和感をもつこともなく、普通の生活に取り入れていると想像します。

これが、コロナ時代を生きる「私たちの今を生きる」になっているはずです。

最後に私が「今、思うことは」は、新型コロナウイルスが流行する前と後、少し前の私たちの日常と、今、現在の私たちの日常とでは、学校生活の変化や、空手の練習の変化、気軽に外食に行けないなど、多くの変化がありますが、それもきつといつかは、思い出に変わっていくはずです。一生に一度あるかないかの、この体験を、今を知らない未来の人々に伝えていくのも、私たち若い世代の務めだと思えます。そして、前を向き元気に明るく、今できることをしていきたいとも思えます。

「まずは生きること」これを忘れずに生きていきたいです。

延期になった2020年東京オリンピックが、来年2021年に開催され、富山を聖火ランナーとして走ることができそうですように・・・祈っています。

また、新型コロナウイルスで亡くなられた方の、ご冥福をお祈りします。